

コラム



“見ざる、聞かざる、

沖縄の海は世界でも有数の美しさを誇っている。慶良間諸島の海、宮古島の海、石垣島の海、そしてもちろん沖縄本島の海も。しかし、この海は、同時に、かつて世界有数の激戦地でもあった。第二次世界大戦末期には爆弾が雨あられの様に飛び交い、多くの市民が犠牲となった地であった。それから70年が過ぎ、当時の戦争経験者も少なくなり、若い人々は「何でこんな綺麗な海で戦争をしたの？」と首をかしげるばかりとなってしまった。

しかし、「何でこんな綺麗な海で戦争をしたのか？」の答えは、おそらく今、目の前にある。特別天然記念物のジュゴンが生息できる美しい海、辺野古の海に機動隊が動員され、米軍基地建設に向けての準備が強行されているからだ。きっと後世になれば「何でこんな綺麗な海に…」と言われるのであろうが、今、美しい海は戦争の基地と化されようとしている。

「何でこんな綺麗な海で…」の答えは、端的に言えば“見ざる、聞かざる、言わざる”ということに尽きるのであろう。現地、沖縄の辺野古では、連日連夜、地元の方々を中心に美しい海を守ろうと、平穏な暮らしを守ろうとの取り組みがなされ、その姿が多くの沖縄県民の心を動かし、沖縄県知事選挙では基地建設反対を掲げた翁長候補が他の候補に大差をつけて当選、基地建設反対は大多数の県

民の意思となった。しかし、この事実は沖縄県という枠内に封じ込められようとしているようだ。

沖縄県以外の都道府県（いわゆる本土）の大手マスコミによる辺野古報道は残念ながら皆無に等しい状況が続いている。報道があったとしても、紙面の片隅や深夜時間帯の放送である場合がほとんどだ。報道を全くしていないとまでは言わないが、多くの人々の目に触れることの無いような報道の仕方では、やはり話しにならないであろう。ちなみに、辺野古において機動隊が動員され、市民側が激しく弾圧された1月14日から15日にかけての大手キー局の放送はというと、フランスの殺人事件、キューバ情勢、中東情勢と海外の話ばかりであった。そして、海外の事件を報道しても自国内の報道をまともにしようもしない有様であるにもかかわらず、ジャーナリズム云々と言っているのだから笑い話もいどころであろう。報道すべきことは、東日本大震災、福島原発事故、介護保険、食糧自給率、長時間労働・・・と山のようにあるであろう。今、足下で起きていることを報道しないのであれば、報道機関としての存在価値は無いに等しいと言わざるを得ない。

また、新基地建設反対を訴えて当選をした沖縄県の翁長知事が、事態の打開をすべく安倍首相に面会を再三に渡って求めたというが、安倍首相は翁長知事に一切会うことなく、

言わざる”

杜 海樹



中東へと、あっという間に出国してしまった。“見ざる、聞かざる、言わざる”…何とも日本はお寒い国だ。

そして、放送の視聴者、新聞の読者の方も“見ざる、聞かざる、言わざる”状態が蔓延してきているようだ。テレビ等で報道されなければ、問い合わせをするなり、インターネットで検索するなりすれば、多少なりとも情報が得られる時代であるというのに。自分の目で確かめるという基本がすっぽりと抜け落ちてしまっている様だ。学校でのいじめ問題、

職場でのパワハラ問題、家庭でのDV問題…どうであろうか？

“美しい”や“綺麗”といった基準・価値判断は、どこか遠くにあるものではなく、自分自身の中にあるものだ。自分の目で見て、話を聞いて、多くの人と話をすることで、それぞれの心の中に生まれてくるものであろう。仮に、どんなに素晴らしい海があったとしても、人々の心のなかに見える目が生まれていなければ、美しいであろう海もただの水溜まりでしかなくなってしまう。その時、悲劇は起きる。



辺野古の海（原版カラー わずかに赤みがかった白砂と澄んだ海の青、空の青が美しい）